

# スーパーグローバル大学創成支援シンポジウム／第5回高等教育推進センターFD講演会 「高等教育の国際化と質保証—新時代に求められるグローバル人材育成とガバナンス改革—」

日 時：2014年11月22日(土) 13:00～17:00

場 所：関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス H号館201号教室

## 開 会 の 辞

村 田 治 (関西学院大学 学長)

本日は「スーパーグローバル大学創成支援シンポジウム」にお越しいただきまして、ありがとうございます。本学は、平成26年度文部科学省「スーパーグローバル大学等事業 スーパーグローバル大学創成支援 (タイプB:グローバル化牽引型)」に採択され、今回はその記念すべき第1回目のシンポジウムとなります。

今回のシンポジウムは、「グローバル化」がもちろん大きなキーワードではありますが、この後に報告がごございますように、目的は、大学改革、大学のグローバル化であると理解しております。その意味では、今後、日本の大学がどうしていくべきか、きょうは皆さんと一緒に勉強していきたいと思っております。

最初に、筑波大学教授で高等教育学会の会長である金子元久先生から「グローバル化と大学改革」についての講話を頂戴し、続いて、リクルート進学総研所長の小林浩様から「大学の国際化と我が国の人材育成」について、その後、本学准教授の江原昭博から「ガバナンス体制の構築とIR導入」、最後に文部科学省高等教育局高等教育企画課長の森見憲様から「高等教育政策の動向と課題について」をご教示頂きます。

講演に先立ちまして、本学のグローバル化、あるいは大学改革についてのご紹介をさせていただきたいと思えます。小林様のレジュメにもごございますように、2011年のデータでは、日本の進学率は52%になっています。OECDの平均は、これも2011年のデータですがちょうど60%となり、一番高い進学率であるポルトガルは97.8%、次いでオーストラリアが95.7%となっております。高等教育研究の権威であるマーチン・トロウが、大学進学率が15%を超えると、大学はいわゆるエリートからマスに移行し、大学進学率が50%を超えると、マスからユニバーサルへ変化するとしています。

日本における進学率の推移を調べると、1969年に日本の4年制大学への進学率は15%を超え、2009年に50%を超えているというのが現状です。さらにマーチン・トロウは、ユニバーサル化について、幾つかのことを述べており、例えば、大学進学率が50%を超えたときに、大学教育の目的が、これまでの「知識と技能の伝達」から「新しい広い経験の提供」へ大きく転換を迎えると

しています。本日のシンポジウムにお越しになる際、お気づきになられたかもしれませんが、この講演会場の階下にコモンズ、いわゆる共同学習スペースを開設しています。本学では2013年度にコモンズを神戸三田キャンパスに開設し、2014年度に本日の会場である西宮上ヶ原キャンパスにも開設しました。また、11月末に新しく建てかえをいたしました中央講堂に、コモンズを増設しています。そういう意味では、トロウの言う「新しい広い経験の提供」、これが大学教育の大きな流れではないかと考えられます。

また、中央教育審議会においても議論されています高大接続の議論も関係しております。今回はセンター試験を単に試験方法を変えるのではなく、まさにセンター試験のあり方を見直すことによって、これまでの高等学校の知識の詰め込み型の教育を大きく変えていくことが提言されています。恐らく5年、10年もすれば、高等学校の教育が変わり、さらにそれを受けて大学教育も変わることが予想されます。いわゆるアクティブラーニングを高校で実践してきた学生が大学に来るようになると、現在のような大学教育で本当に満足できるのだろうかという意味で、5年後、10年後に、今までの大学教育の延長では、高校生から選択されなくなる大学がでてくる大きな岐路を迎えるのではないかと考えております。本学には千里国際高等部、中等部がありますが、そこでの教育はまさに欧米式で、例えば小学校4年生の授業を見学していて、ある女子児童がプレゼンをした児童に対して、「どこが悪かったのか一言だけ言いますと、ちゃんとアイコンタクトができていません。」などと発言していたことに驚きました。しかし、これが2年前に中央教育審議会でも答申に取りまとめられました、知識・技能の伝達ではなく、グローバル化として求められている、答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力等ではないかと思えます。大学を卒業しても、生涯学び続け、主体的に考える力を育成できるように、大学教育にグローバル化という形の改革が始まろうとしており、これから大学がどう変わっていくか、本学を含めて考える必要があります。

本日はこういったことも含め、皆様と一緒にここで勉強していくことができればと思います。皆様、本当にお忙しい方ばかりですので、きょうは本学までにお越しいただき、ご講演いただくことにお礼を申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。